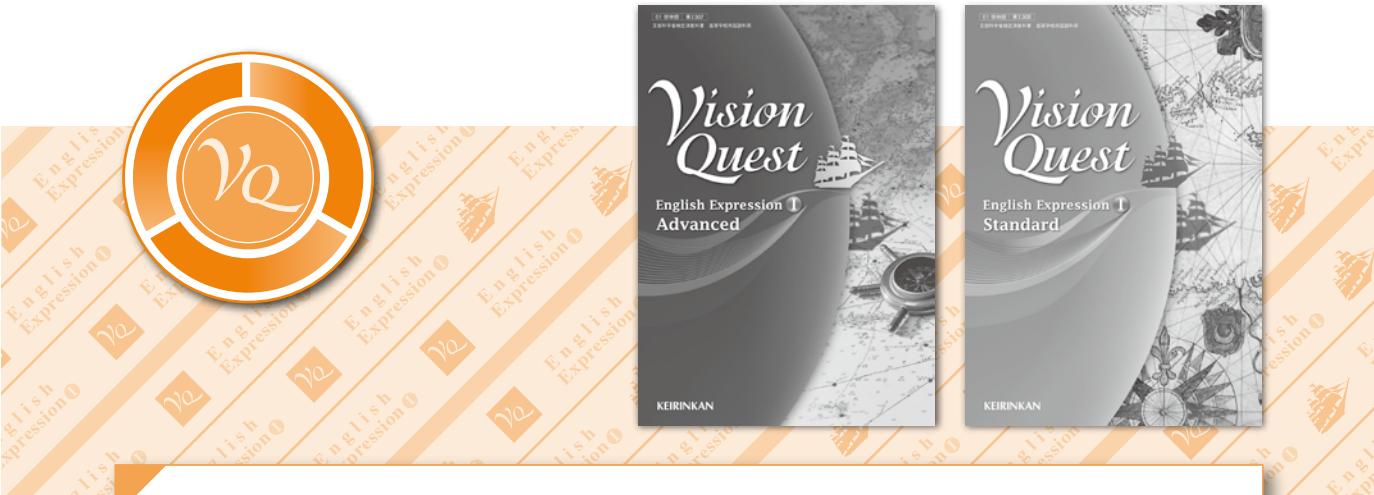


Vision Quest English Expression I

[英語表現I 授業実践記録] Part 3



“Use it” を用いた英作文についての考察

京都府立南陽高等学校 大橋 早苗

p.2-5

教科書の活用で土台を固める

北海道札幌東高等学校 高野 龍彦

p.6-7

生き生きと、生きた英語を話す授業

愛知県立春日井西高等学校 佐々木 誠

p.8-11

『Vision Quest総合英語』を併用した効果的な授業

静岡県立静岡高等学校 高橋 宏彰

p.12-13

生徒の気づきを大切にし、「伝えたい」という意欲を高める工夫

徳島県徳島市立高等学校 第1学年 英語科

p.14-16

“Use it” を用いた英作文についての考察

京都府立 南陽高等学校
大橋 早苗

使 用 教 科 書	Vision Quest English Expression I Advanced
单 位 数	3単位
使 用 副 教 材	ワークブック, 音声 CD, Vision Quest 総合英語 など
使用デジタル教材・機器	

1. 対象と目的

本校では1学年の生徒を対象に、普段の授業では十分に扱いきれていない “Use it” の問題を用いた英作文を、定期テスト前の自主学習の一環として「自由勉強ノート」に書かせている。自由提出なので、きちんと書いてくる生徒もいれば、まったく手をつけないままの生徒も多く見られる。文法を学ぶうえでの最終目標は、習った文法事項を用いて自由に英語で表現できることであるとの観点から、ぜひこの課題にチャレンジしてほしいと日々考えている。そこで、「学校の授業をきちんと受けければ、こんなに書けるようになる!」ことを生徒に実感させるべく、また、レッスン前とレッスン後で英作文の質に変化が表れるのかを明らかにするべく、今回の研究を行った。

2. 手順

本校 1年生 2クラスの生徒が、各レッスンの終わりに掲載されている “Use it” を用いて英作文の課題を行った。その際、当該レッスン前（予習をしていない状態）と、当該レッスン後（予習→授業で文法事項説明→Exercises 答え合わせ→ワークブックを用いて復習と答え合わせ→例文テスト）の各 2 回を 3 レッスン分、計 6 回に分けて書かせた。英作文をさせる際にかけた時間は、授業開始時の 5 分間であった。なお、欠席などの事情で、各レッスンの被調査者数はそれぞれ 73 名、74 名、68 名であった。

また、“Use it” にはそれぞれのレッスンで習う文法事項を用いて 3 文書くよう指示されているが、生徒が書いた英文を点数化し、より明確にするため、それぞれ 5 文ずつ書くように指示した。生徒が書いた内容は以下の通りである。

①あなたが最近驚いたことについて

(Lesson 6 - ②受動態)

②あなたの将来の夢について

(Lesson 7 - ①不定詞)

③あなたが日常生活で大事であると考えることについて

(Lesson 7 - ②不定詞)

3. 分析方法と結果

各生徒が書いた解答を当該レッスンの文法事項に基づいて点数化した。Lesson 6 - ②においては、受動態を含む文が正しく書ければ 1 点、Lesson 7 - ①②においては、不定詞を含む文が正しく書ければ 1 点というように、加点方式で合計点数を計算した。なお、明らかな文法の誤り (I was surprising など) を含む文は加点しなかった。全レッスンを通じて、点数は最低値 0 点、最高値 6 点であった。Lesson 6-②の平均点はレッスン前が 1.04 点 ($SD^*=1.11$)、レッスン後が 1.44 点 ($SD=0.88$) であった。Lesson 7 - ①の平均点はレッスン前が 2.45 点 ($SD=1.27$)、レッスン後が 3.03 点 ($SD=1.05$) であった。Lesson 7-②の平均点はレッスン前が 1.60 点 ($SD=1.18$)、レッスン後が 2.04 点 ($SD=1.10$) であった。

* $SD \cdots$ 標準偏差 (Standard Deviation)

	被調査者数(n)	平均	標準偏差(SD)
Lesson6 - ② レッスン前	73	1.04	1.11
Lesson6 - ② レッスン後		1.44	0.88
Lesson7 - ① レッスン前	74	2.45	1.27
Lesson7 - ① レッスン後		3.03	1.05
Lesson7 - ② レッスン前	68	1.60	1.18
Lesson7 - ② レッスン後		2.04	1.10

Tab.1 各レッスンの被調査者数、平均点および標準偏差

次に、各レッスン前後の平均値の間で t 検定を行った。その結果、3 レッスンすべての平均値の間で有意な差が見られた。 $t(73) = 2.60, p < .05$, $t(74) = 3.04, p < .05$, $t(68) = 2.18, p < .05$ 。以下に平均点の変化を図示する。

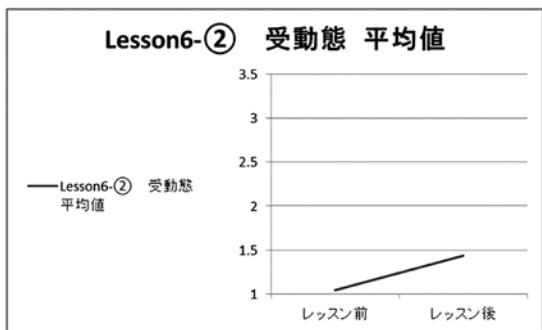


Fig.1 Lesson 6 - ② 平均値

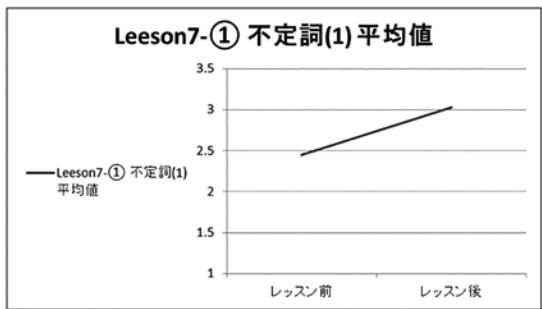


Fig.2 Lesson 7 - ① 平均値

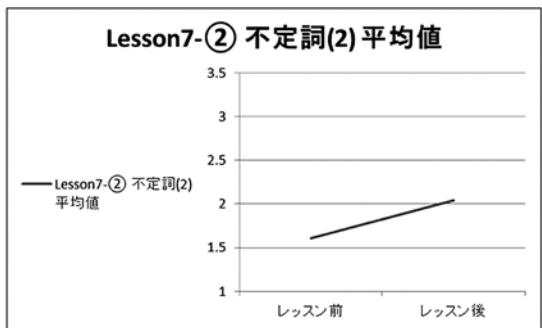


Fig.3 Lesson 7 - ② 平均値

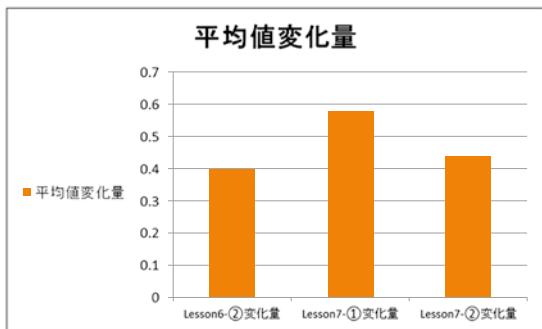


Fig.4 各レッスン平均値変化量

4. 考察

すべてのレッスンにおいて、レッスン後の平均値が高くなっていることから、予習→授業→復習を行うことで英作文の量と質が向上していることが統計的分析により明らかになった (Fig1,2,3)。

Lesson 6 - ②について、レッスン前の平均値が低く出ているのは、「私は驚いた」という表現である “I was surprised” という表現が定着していなかつたためであると考える。レッスン後はそうした表現を確実に書ける生徒が増え、全体の平均値が向上した。また、レッスン後は I was surprised at <名詞> と I was surprised that SV の使い分けもできるようになっており、学習効果が表れていると実感できる結果であった。

そのほか、レッスン後では It is said that ~の構文を用い、be injured in ~, be pleased with ~など、本教材で扱われた表現をそのまま英作文に生かしている生徒もいて、表現のバリエーションが増えていることがわかった。

Lesson 7 - ①について、レッスン前には “I want to be ~” という表現の羅列になる生徒が多かったが、レッスン後は形式主語の It や形式目的語の it を用いた構文が書けるようになっていた。また、形容詞的用法である something to do の表現を用いた生徒もいて、これは教科書 52 ページ 7 番の例文、 “Bring a notebook and something to write with.” を応用したものだと考えられる。教科書の例文を取り入れ、そして英作文に生かされるようになる過程を見るのは本当に喜ばしいことである。

また、この不定詞 (1) の項目は、レッスン前の平均値 2.45 からレッスン後の平均値 3.03 と変化し、3 レッスンの中ではもっとも変化量の多い結果となつた (Fig. 4)。原因の一つとして考えられるのは、不定詞の基本的な使い方は中学校で既習事項であり、生徒にとっては親しみやすい項目であったのではないかということである。3 レッスン中でレッスン前の初期値がもっとも高く出ているところからもその傾向が伺える (Tab.1, Fig.2)。より気軽に英作文に親しむために、不定詞の項目から指導を始めるのも一つの手であるのではと感じた。

Lesson 7 - ②について、レッスン前は既習事項である *it* を用いた構文を書く生徒が多かった。この傾向は Lesson 7 - ①には見られなかつたので、不定詞の文法項目が段階的に学習されていることがわかる。今回新たに見られた表現は、*what to do* や *how to do* などの＜疑問詞 + to 動詞の原形＞や、使役動詞 *make* を用いた表現、必ず不定詞を伴う動詞を用いた表現 (*allow <人> to do* など) であり、さらに *want* の使い方も、Lesson 6 で見られたような *I want to be* ～のみに限らず、*I want <人> to do* などのように用いている例が見られた。生徒は今回のレッスンで習った表現を積極的に用いており、表現の幅が広がっていることが伺える。

今回は平均値の比較という単純な分析ではあるが、諸先生方の一助になれば幸いである。これまでなんとなく効果はあるだろうと信じて授業などを行ってきたが、今回の結果により、生徒の予復習や、我々教員の日々の実践は、生徒が書く英作文に何らかの影響を及ぼしていると言ってよい。また、使用している本教材が、生徒の英作文の能力を向上させるのに役立っているということもわかつた。この事実を生徒やほかの先生方に還元することで、生徒と教員が「今やっていることは間違っていない!」と自己効力感を持って日々を過ごせるようになればよいと思う。

5. 事例分析

さて、全体として効果があるということがわかつたので、個々の生徒が書いた英作文の分析をしてみたい。ただし、生徒が書いた英作文をそのまま掲載しているため、誤りがある文章も含まれている。

(1) Hさんの英作文 0点→2点

レッスン前:I surprised that my friend has five sisters.

レッスン後:I was surprised at my cat's growth.
I was pleased with her growth.

レッスン前では明らかな文法の誤りが含まれる文章を書いていたが、レッスン後は *be surprised at* ～の形を正しく用いることができていた。また、*be pleased with* ～の表現を用いた文章を加えること

で、自分の感情も表現できるようになっていた。

(2) N君の英作文 1点→2点

レッスン前: Mr. Okamoto is very afraid.

レッスン後: I was surprised at the World Cup. Neymar was injured in the game.

本人曰く、レッスン前のこの文章は「岡本先生は怖い」ということを言いたかったらしい。文法的な間違いがあるわけではないが、自分の言いたいことを正確に伝えられてはいない。それに対して、レッスン後ではワールドカップで内马尔選手がけがをした、という事実をきちんと伝えられている。

(3) Fさんの英作文 2点→3点

レッスン前: I want to be a teacher. It is important for me to study.

レッスン後: I want to be a teacher. I was glad to see a cute child. It is important for me to study.

文章の内容自体はレッスン前後で変わらないが、レッスン後には「かわいい子どもを見てうれしかった」と自分の感情を表す文章が書き加えられていた。

(4) Kさんの英作文 1点→3点

レッスン前: I want to be a social study teacher in the future.

レッスン後: I want to be a social study teacher. I found it important to convey social study fun. It is interesting for me to teach to other people.

レッスン前には自分が「～になりたい」という表現のみが書かれてあるが、レッスン後には「社会科は楽しいということを伝えるのは大事だ」といった趣旨の文章や、「自分にとって他人に社会科を教えることは楽しい」と感情を表すことができている。

(5) Iさんの英作文 2点→4点

レッスン前:I want to become a doctor in the future. I want help the sick people.

レッスン後:I want to be a doctor. I want to help sick people. It is difficult to help sick people. It is necessary to study about sick.

レッスン前は want to do の使い方に誤りがある文章が見られたが、レッスン後は形式主語の It の構文を用い、この時期には比較的難しいと思われる necessaryなどの語が正しく使っていることがわかる。

(6) M君の英作文 2点→3点

レッスン前:I found it important to say “Thank you.” It is important to live.

レッスン後:I found it important to have a dream. I want you to try it. I don't know what to do.

元々英語が得意な M君ではあるが、レッスン前よりもレッスン後のほうが文字数も増え、使用する文法項目も増えていた。特に want <人> to do の表現や、<疑問詞+ to 動詞の原形>といった既習表現が新たに書き加えられていた。

レッスン前とレッスン後との比較では、レッスン後のはうが自分の「感情」を表現できているように思われる。また、短文の羅列ではなく、1つの事項、たとえば Lesson 6においては「驚いたこと」について、複文で深く書けるようになっている。事実のみではなく、そのとき自分がどう感じ、どう思ったかまで踏み込んで書けるようになると、自然と量も増え、内容も充実したものになるのであろう。

本教材を用いた普段の授業がきっかけとなり、生徒の英作文に何らかの影響が及ぼすことがわかり、今後もより有意義に授業に臨めるように思う。

大橋 早苗
おおはし さなえ

京都市生まれ。神戸大学大学院総合人間科学研究科修了。専攻は社会心理学。当時の研究テーマは「自己開示」と「過剰適応」。現在、専門学科担任とバレー部の顧問を務める。丘の上にある学校にママチャリ通勤継続中。



教科書の活用で土台を固める

北海道 札幌東高等学校

高野 龍彦

使 用 教 科 書	Vision Quest English Expression I Advanced
单 位 数	2 単位
使 用 副 教 材	ワークブック
使用デジタル教材・機器	

1. はじめに

現在、1年生を担当しており、「コミュニケーション英語I」と「英語表現I」の授業を担当している。生徒の様子を見ていると、非常に積極的にコミュニケーション活動に取り組む一方、文法知識の薄さと語彙力の弱さを感じる。

この「英語表現I」の授業においては、基本的な文法事項をきちんと身につけること、および身につけた文法事項が活用できることを1年間の目標とし、表現活動に必要な最低限の文法事項を扱った Vision Quest を採用した。

2. 具体的な指導について

教科書やワークブックを十分に活用した指導を展開している。知識を確実に身につけさせながら、できるだけ多くの表現活動を行うことによって文法事項を定着させる指導を実践している。教科書と参考書、ワークブックと辞書の4点をフルに活用して授業を行っている。

(1) 実際の授業の進め方

教科書の Grammar の基本例文の和訳（「Grammar 基本例文一覧&日本語訳」）を配布して、英語に直させる。生徒は事前に Exercises の予習を行っているが、基本例文の暗唱は課題としていない。机間巡回しながら予習状況や理解度を確認したうえで Grammar の解説を行う。同時に参考書の該当箇所も開かせて、教科書の例文以外の箇所のポイントも確認している。次に Exercises の解答の確認を行う。生徒には事前に予習を指示していて、ペアや数名のグループでお互いの解答を確認しあうようにしている。双方の気づきがあり、活

発に意見交換を行っている。その後は、解答の確認を行うが、特に英作文の問題については、解答を単に示すだけでなく誤答を示して、生徒が間違いの箇所に気づくように提示している。特に、①動詞の形（時制、3 単現の s）、②名詞の形（冠詞、複数形）、③主語と動詞の一致の 3 点については細かく指導する。Use it では、数分でそれぞれの意見を書かせ、ペア同士で意見を交換しあい、さらに文法をチェックさせる。提出はさせないで、机間巡回しながら表現方法などの質問に答えている。自分の書いた文章をきちんと見てもらいたければ個別に質問させる。その後、Expressing に進み、Use it と同様、ペアやグループで意見交換や文法チェックを行わせている。予習なしの即興に近い形で書かせているので、最初はアイデアがすぐに浮かばずに書けない生徒もいたが、何度も繰り返し行っていると、少しづつ書けるようになっていった。次に各レッスン冒頭の Model Conversation の Listening Task, Pronunciation へと続く。Pronunciation は問題形式になっているせいか、生徒たちの興味関心が高く、CD を聞いて答えを出したあとは、周りの生徒と答えを比較してみたりして、楽しみながら取り組んでいる。内容に応じて巻末の「付表」を、Pronunciation に関連づけて使用している。巻末の Activity にも取り組みたいが、時間が足りないので、まだ触れていない。

(2) 注意点

文法事項の説明には、参考書や辞書を用いてじっくり時間をかけるが、問題演習や表現の活動はあまり時間をかけずに、声に出したり書いたりして、活動する機会を数多く与えることを主眼に置いて取り組

ませている。

覚えておいたほうがいい単語や表現が出てきた際は、必ず辞書で確認している。例えば、Lesson 2 の Exercises 1 にある “upstairs”, “online” を用いて副詞の説明を行った。さらに、未習の文法事項が出てきた際にも、その場で説明して確認するようしている。例えば Lesson 6 の Function の 2. に、“So am I.” という表現が出てきたが、基本的なことを説明したのち、参考書や辞書でさらに確認させている。時間がかかってしまうが、一度きちんと調べておくことによって、再び出会った時の印象が強くなると考えており、また模擬試験などの対策にもつながることを考えると、素通りはできない。

(3) 考査などについて

生徒は、考査のための勉強に、巻末の「Grammar 基本例文一覧&日本語訳」を活用している。ワークブックは考査範囲に含めて、考査後に提出させていく。

本校は 2 期制をとっており、前期に 2 回の定期考査および夏季休業明けに校内実力テスト（長期休業課題確認テスト）を実施している。中間考査の範囲は「時制」まで、校内実力テストは「受動態」まで、期末考査は「不定詞」までだった。実力テストの範囲は既習事項のすべてであったため、中間考査の範囲と一部が重複していて、生徒にとっては既習事項の定着が図られた。

(4) 講習の教材として

秋の講習の教材（基礎コース）では、中間考査・実力テスト・期末考査の 3 つの考査から、「英語表現 I」の文法事項に関するすべての問題を、問題形式ごとに整理して取り組ませた。下位層をターゲットにした基礎コースは、少人数（約 20 名）で行われており、じっくりと進め、一人ひとりの力を掌握することができた。教科書やワークブックからの問題が大半を占めており、早い時期に何度も繰り返し復習できる機会を持てたことはプラスになった。

3. おわりに

今後の予定であるが、Vision Quest で指導する文法事項は 12 個であり、年内には教科書をすべて終え、扱いきれなかったほかの文法事項はワークブックを用いて指導していく予定である。なお、2 年次からは『Vision Quest English Expression II』を用いる。

生徒たちのほぼ全員が国公立大学への進学を希望していて、英文法の土台を築くことが 1 年間ですべきことと考えている。センター試験で思うように得点のとれない生徒が毎年少なからずいて、残念な気持ちになるが、文法や長文読解などの理解状況を聞いてみると、「なんとなく答えしている」という答えが多かった。表層的な理解にとどまって、学んだ知識を活用するまでの演習や表現の活動が不足していると感じた。週 2 時間の授業しかなく、まだまだ活動の時間は少ないが、Vision Quest を最大限に活用し、文法事項の基本的知識を習得し、その活用を図ることを 1 年間続けることによって、「なんとなく」わかったつもりの生徒を少しでも減らして、進路実現に向けての一助となることを願いながら、将来、様々な場所で活躍する生徒たちが、実際に英語を使うときに困らないよう、しっかりとした土台を作っていくたい。

高野 龍彦

たかの たつひこ

茨城県日立市生まれ。北海道札幌東高等学校教諭。現在、英語科主任および第 1 学年主任、男子バレー部顧問。



生き生きと、生きた英語を話す授業

愛知県立 春日井西高等学校
佐々木 誠

使 用 教 科 書	Vision Quest English Expression I Standard
単 位 数	2単位
使 用 副 教 材	ワークブック、音声 CD
使用デジタル教材・機器	iPad

1. はじめに

教員 2 年目でまだまだ経験が浅く、実践記録を書くなど大変恐縮ではあるが、本校の生徒が楽しそうに生き生きと英語を話す姿を多くの人に伝えたいと思い、載せていただくことに決めた。生き生きと英語を話すようになった活動とあわせて、iPad を活用していることも紹介したい。ICT 教育の発展の一助となれば幸いである。なお、本校の英語表現Iの授業は 2 単位であり、少人数（20 人）クラスで行っている。

2. 音読・コミュニケーション活動

（Lesson 5 を例に）

Model Conversation を使って音読をしたり、コミュニケーション活動としてロールプレイ活動を行ったりしている。表 1（11 ページ）は活動の手立てである。活動時間をかなりタイトに設定しているのは、活動のテンポを第一に考えているためだ。（音読をだらだらとやると、徐々に飽きてきてしまう。）次から次へと新しい活動にしていくことで、集中力を保ったまま音読させることができる。テンポ維持のために、すべてのペアが読み終わる前に打ち切ってしまうこともある。そうすると一部のペアは毎回最後のほうが読めなくなるが、打ち切る際に、「これくらいの時間で読めるとベストだ、がんばろう」などと声をかけ、すべて読みきるよう指導している。

どのレッスンも音読活動を行う前に Model Conversation のシチュエーションを考えさせている。具体的なイメージをもって音読することで、感情を込めたりジェスチャーを付け加えたりでき、英語の修得が効果的になると考えるからだ。また、のちほどロールプレイ活動の際に恥じらうことなく、思い

切り演技できるようにするためでもある。

音読活動では初めに十分な音声モデルを与え、だんだん教科書から離れて自分で記憶した英文を正しく話すことができるようになる。これはロールプレイ活動をする際に、なるべく教科書を見ないで行われたいからである。まずリピート・リーディングで音声モデルを与え、通訳読みで生徒の発音・イントネーションを確認し、細かく指導する。生徒が音声モデルなしで読む活動においても発音・イントネーションを意識させ、机間指導を行っている。ペア・リーディングを終えたあとは徐々に教科書から離れて音読させる。リード・アンド・ルックアップや鉛筆読みを数回行えば本文はほとんど覚えられてしまう。その後はシャドウイングを行って教科書を見ないでアウトプットする練習を行う。

ロールプレイ活動では、シチュエーションをペアごとに自由に考えさせている。生徒が考えたものの例を以下にあげる。

- 「場所は京都。会って 3 回目のデートで、ご飯をおごることで告白しようとしている。」
 - 「付き合って 4 年目。誕生日にちょっと高級なレストランに来ている。このあとプレゼントを渡す。」
- 生徒の考えるシチュエーションは面白い。考えさせたうえで音読させると、声は大きくなり、ジェスチャーは増え、言い方も自分たちで考えながら変えて、とても楽しそうに音読をする。教科書本文が生きた英語になる瞬間である。「アドリブを入れてみよう」と声をかける。すると、Kaito 役の生徒がアイスクリームを追加注文したり、会話文の最後に “Thank you! I love you!” と言って抱きしめたりするなど、アドリブを付け加えたりする。

3.iPad の活用

(1) 新出単語確認

新出単語の導入の際に、iPad の単語帳アプリを活用し、単語のつづりとともに、発音の音声モデルと単語の意味に関連した画像（図1）を同時に提示し、記憶させる。画像と言葉を結びつけて記憶することで、より効果的なインプットを図るのが目的である。確認後、ペアで意味確認のクイズをさせるのが、たとえば compare という単語のヒントとして両手を天秤のように動かすなど、単語のイメージをジェスチャーで示すことがある。これは言葉と提示したイメージを結びつけて記憶していると考えられ、定着しやすいのではないだろうか。

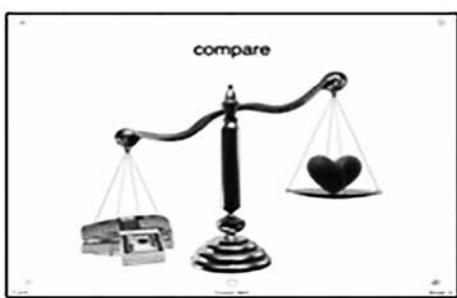


図 1. Flashcards Deluxe ©Ernest Thomason

(2) Pronunciation

Pronunciation は解答確認後、iPad アプリを活用して発音練習を行う。まず使用するのが「発音図鑑」だ。（図2）画像ではわかりにくいが、発音記号をタップすると舌が動くとともに発音される。また、前から顔を見るようにもでき、口の形も確認できる。さらに練習を重ねたい発音には、「Coach's Eye」というカメラアプリを用いる。リアルタイムで私の口をスクリーンに映して説明したり、私と生徒の口の動きを両方録画して左右に並べて比較したりする。（図3）口だけを映すので気持ち悪がられるが、動画を見たあとにペアで確認させると、楽しそうに確認しあう。



図 2. 発音図鑑 © 東京外国語大学 根岸雅史教授

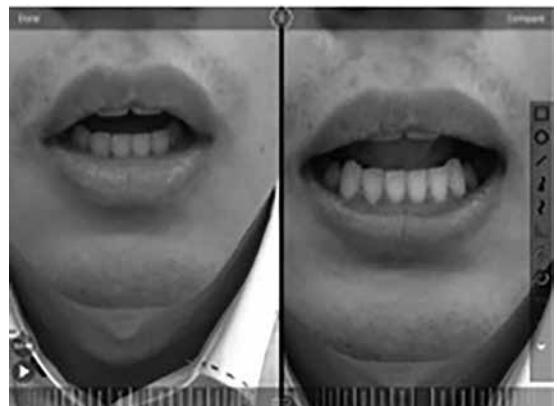


図 3. Coach's Eye ©TechSmith Corporation

4. 終わりに

最後に、これから実施を考えている活動を紹介して終わりたい。ロールプレイ活動があまりに活発で面白いので、ビデオ撮影を考えている。撮影した動画は以下の 2 つの活用を考えている。

一つ目は授業の導入として活用する方法だ。年度初めに生徒たちをレッスンごとに割り振り、ロールプレイ活動の担当を決めておく。担当箇所の本文を予習させ、そのレッスンの授業よりも前にビデオ撮影を

し、授業の冒頭に生徒に見せる。こうすることで、より具体的なイメージをもって本文の音読活動をすることができる。ただ、予習や撮影の手間がかかるということと、生徒にシチュエーションをあらかじめ提示することになるので、生徒たち自らが考えなくなるかもしれないことが懸念される。

二つ目は他者への動機付けとして使う方法だ。授業中に優れたペアのロールプレイ活動を撮影し、ほかのクラスのロールプレイ活動後に紹介していく方法だ。こちらは音読活動後に見せるため、直接音読活動やロールプレイに影響を与えるわけではないが、次回の活動に向けてのモチベーションにつながるのではないかだろうか。

佐々木 誠

ささき まこと

1990年、愛知県名古屋市に生まれる。愛知教育大学中等教員養成課程英語専攻卒業。大学在学時、オーストラリアで3週間教育実習を行い、現地の子どもたちに日本語を教えた。教員になってからの趣味はゴルフ。学校では吹奏楽部の第二顧問を務める。本年初めて担任を持ち、毎日の授業に生きがいを感じている。



表1

活動名	時間	指導の手順	指導上の留意点	実際の生徒の反応
リピート・リーディング	1分	教師が日本語訳、英文の順で1文ずつ音読する。続いて生徒が英文を音読する。	重要文を簡単に説明しながら音読させる。声が出ていなくても何も言わず、発音だけ確認する。 (ペアになれば自然と声が出るため、ここでは指導しない)	声があまり出ず、ぼそぼそと音読している。
	1分	教師が1文ずつ英文を音読する。続いて生徒が音読する。	発音を確認しながら音読させる。	先ほどよりは声が出るが、まだ小さい。
	1分	教師が1人分の英文を気持ちを込めて音読する。続いて生徒が音読する。	わざとオーバーに演じて、真似させる。	教師までとはいわないが、笑いながら演じるようになり、声も少し大きくなる。
通訳読み	1分	教師が日本語訳を読んだのち、該当する英文を生徒が音読する。	発音、イントネーションを指導する。先ほど演じたことも忘れないよう声をかける。	先ほどよりは演じないが、声は大きいまま。
ペア・リーディング	1分	ペアで1文ずつ交互に音読する。終了後、順番を変えて音読させる。	じゃんけんで順番を決めさせる。	じゃんけんだけで盛り上がり、その元気のまま音読していく。
	1分	ペアで一役分ずつ交互に音読する。終了後、順番を変えて音読させる。	役を演じさせる。	身振り手振りをする生徒や、先ほど演じたことを再現する生徒が増える。
リード・アンド・ルックアップ	2分	教師の“read”の合図で1文を黙読させる。“up”的合図で顔を上げ、何も見ずに音読させる。ペアで向き合って行う。	本来、人と話すときはどのように話すかを考えさせ、人の顔を見ながら英語を話す練習であることを伝える。	同時に顔を上げて向き合うと照があるのか笑顔で活動する。相手の口の動きが助けになる場合もあるようだ。
	3分	教師の“read”的合図で1文を黙読させる。“up”的合図で顔を上げ、待機させる。数秒後，“go”的合図で何も見ずに音読させる。ペアで向き合って行う。	初めは短い時間で行うが、最後になるにつれて急に時間を長くしたり、途中で昨晚のご飯を思い出させるなど別の話をしたり、九九を言わせたりする。	
鉛筆読み	1分×2	ペアでじゃんけんをさせ、負けた人は勝った人の教科書の上に鉛筆を1本置く。勝った人は負けた人の教科書の上に鉛筆を2本置く。2回繰り返す。	「性格が出るよ!」など言いながら盛り上げる。 わからない場合は右側の日本語を頼るよう声をかける。	繰り返すうちにだんだんと英文が隠れていくのだが、ペアの相手に鉛筆を置かれるので意地になって必死に読もうとする。
シャドウイング	1分×3	教科書を見ずにCDの音声とほぼ同時に音読させる。iPhoneアプリ「語学プレイヤー」<NHK出版>を活用し、音声スピードを1.2倍、1.5倍と上げていく。	今までの音読の成果が出ると伝える。難しいと感じる生徒は教科書を見てもよいと伝える。	CDの音声にはついていく。スピードを上げていくと、舌が回らずついてこられなくなるが、時間がかかるが最後まで言い切ることはできる。今までの活動で英文をほとんど覚えているからだろう。
ロールプレイ活動	2分×2	ペアで気持ちを込めて音読する。(声のトーンや話し方)終了後、役割を変えて音読させる。	ペアごとに新たにシチュエーションを設定させる。 ペアを変えた際は面白いシチュエーションを提供する。	自分たちが考えたシチュエーションを楽しみながら音読している。一部、アドリブを入れる生徒もいた。

『Vision Quest総合英語』を併用した効果的な授業

静岡県立 静岡高等学校

高橋 宏彰

使 用 教 科 書	Vision Quest English Expression I Advanced
単 位 数	2 単位
使 用 副 教 材	Vision Quest総合英語, ワークブック, Grammar 24
使用デジタル教材・機器	

1. はじめに

本校の1年生は、「コミュニケーション英語I」が3単位で「英語表現I」が2単位で、1コマ65分の授業である。「英語表現I」は1時間間をALTとのティーム・ティーチングで、もう1時間を『Vision Quest English Expression I Advanced』教科書の文法箇所を日本人教師が1人で行っている。

2. 生徒に対する目標

- 1 学期 : ALTによるスピーキング・テスト（1対1）
- 2 学期 : 生徒（5～6人）によるスキット（小劇）
- 3 学期 : 生徒（5～6人）によるディベート

3. 宿題

文法箇所の授業が終わるたびにワークブックを提出させている。1年から2年の春休みと2年のゴルデン・ウィークは、Grammar 24を宿題とした。

4. 実践例① Model Conversation

(1) 対話文の音読練習

K1 : The steak and the pizza were so delicious.
I think ① I'll go and get another helping.
E1 : I can't believe it! You've already had four plates. Can you really eat that much?
K2 : I think I can... maybe.
E2 : You'd better eat it all. They may charge you extra if you leave food on the plates.
K3 : Really? Can you help me with this plate?
E3 : No! ② I'm stuffed, and I have to watch my weight.
K4 : OK, OK. I'll make sure I finish it. I must have some dessert, too, though.

最初に上記の対話文を生徒の前で生徒がALTと

ともに読む。次にやや難しいと思われる語句（下線部①②）を英語で説明する。たとえば、①は “I'll go and get more.”, “I'll go and get a second helping of the steak and the pizza.”, ②は “I'm full up to here.” のように、簡単な英語で言い換える。up to hereのような口語表現についてはジェスチャーを交えるとわかりやすい。最後に生徒同士のペア・ワークで音読する。

(2) 対話文で扱っている文法事項

ここでは助動詞を扱っているので、下記の助動詞を使った対話文を作成し、ALTとJTEで対話した。

JTE : What language <u>can</u> you speak?
ALT : I can speak English.
JTE : <u>Can</u> you speak Japanese?
ALT : A little.
JTE : You <u>have to</u> learn Japanese more.

次に、生徒にcan, could, may, might, must, have to, need, willなどをを使った文を自由に作らせ、前で発表させる。その際、じゃんけんをさせ、生徒のどちらから始めるか決めさせる。

生徒 A : <u>Can</u> I use your dictionary? I <u>need</u> it in the first class because I forgot to bring a dictionary from my house.
生徒 B : Ok. I <u>may</u> lend it to you. But I <u>have to</u> use it in the third period.
生徒 A : All right. I <u>will</u> return it to you by the second period.

5. 実践例② Pronunciation & Function

Lesson 5ではカタカナ語を扱っているので、最初にJTEが日本語でカタカナ語を発音し、次にALTが英語を発音し、生徒に日本語と英語の発音やアクセントの位置の違いを認識させる。

1. JTE : ポ・リ・ス ALT : po LI ce
 2. JTE : パ・ター・ン ALT : PAT tern
 3. JTE : カ・レ・ン・ダ― ALT : CAL en dar
 4. JTE : ボ・ラ・ン・ティ・ア ALT : vol un TEER
- Function でも ALT と JTE で音読する。

ALT : Can I park my bike here?
 JTE : I'm afraid you can't.
 ALT : Can I have a doggy bag?
 JTE : Certainly.

次にやや難しいと思われる語句（下線部ア）を英語で説明する。たとえば、アを “A doggy bag is a bag for taking home any food that is left after a meal at a restaurant.” と説明したのち、a doggy bag を言い換えた文で再度、ALT と音読をする。

ALT : Can I have a bag for taking home any food?
 JTE : Certainly.

6. 実践例③ Grammar & Exercises

本校では参考書を毎時間授業に持参するよう指導している。

(1) 助動詞① (教科書 pp.36-37)

左ページの解説については、JTE のみで行う。『Vision Quest 総合英語』を使いながら文法事項について説明し、右ページの問題を生徒に解かせ、解説を行う。まず、参考書 p.97 を開き、助動詞の意味とルールを認識させる。次に教科書 p.36 のそれぞれの例文の説明に入る。参考書 p.98 の上の図が大いに役立つ。

また could ≠ was able to については参考書 p.98 の下の「英作文のコツ」を使って丁寧に説明する。また could, may, might, must, have to についても教科書 p.36 の例文を使って説明し、理解させる。さらに、could, might, would などが過去の出来事を表すわけではないので参考書 p.101 の Crossover を読んで確認させる。特に must (～に違いない) の反意表現が don't have to ~ 「～する必要がない」であることを説明するのに、参考書 p.103 を大いに利用した。

(2) 助動詞② (教科書 pp.38-39)

教科書 p.38 についても、教科書 p.36 同様に教科書と参考書を使って例文の説明を行っている。次の項目は、生徒も間違いやすいため、特に注意して説明を行う。

ア. should, ought to の2つの意味「～すべきだ、～したほうがいい」〈義務・助言〉と「～のはずだ、～するはずだ」〈推量〉

イ. had better <動詞の原形> や had better not <動詞の原形>, ought not to <動詞の原形> の not の位置、had better の意味を参考書 pp.104-105 を使って説明する。

ウ. used to と would often の違いを p.108 の「質問箱」を使って説明する。

最後に教科書 p.39 の Exercises を、教科書 p.37 同様に答え合わせをする。英作文に関しても、生徒に板書させて添削を行う。

7. 毎週行う小テスト

『Vision Quest 総合英語』についている「基本例文集」を 20 題ぐらい暗記させ、毎週水曜日の授業中にテストを行っている。7 割とれない生徒は金曜日の昼休みに同じ範囲で再試験を行っている。そこでも 7 割とれない生徒は、間違ったところを 3 回書かせてその場で提出させている。

8. 終わりに

ALT とのチーム・ティーチングは、英語でコミュニケーションすることの楽しさを教えている。一方、文法の部分では教科書とワークブックの練習問題や基本例文集を通して繰り返し英文に触ることによって正しい英語の習得に力を入れている。

高橋 宏彰

たかはし ひろあき

静岡県生まれ。東京外国语大学卒業後、Bellevue Community College にて英語教授法を学ぶ。第1回アメリカ語学研修派遣生として文部省から派遣され Georgetown University で TESOL を習得。現在、音声学と音韻論に関して静岡大学名誉教授と勉強会を行っている。静岡県高等学校英語研究会・英語スピーチコンテスト主担当。

生徒の気づきを大切にし、「伝えたい」という意欲を高める工夫

徳島県 徳島市立高等学校

第1学年 英語科

使 用 教 科 書	Vision Quest English Expression I Standard (普通科) / Advanced (理数科)
単 位 数	2単位
使 用 副 教 材	ワークブック、音声CD、Vision Quest総合英語 など
使用デジタル教材・機器	PC、プロジェクター、CDプレイヤー

1. はじめに

本校は創立52年目を迎える、各学年とも普通科7クラス、理数科1クラスの学校である。「学問・スポーツ・芸術」を3本柱とする文武両道の学校で、県内トップクラスの進学校としても知られている。また、開校当時から国際交流が盛んであり、生徒たちが国境を越えて人と人とのつながりを体感できる機会を設けてきた。その一つは、徳島市の姉妹都市であるアメリカ・ミシガン州サギノー市と毎夏行っている「語学研修文化交流推進事業」というプログラムで、参加者は現地の大学に滞在し、語学研修をはじめ、ホームステイをするなど、現地の方々との交流を深める中で国際感覚を磨いている。

新課程が始まり、教師は生徒の「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」ために、授業中に生徒が興味関心を持って取り組める言語活動を行うことが求められている。『Vision Quest 英語表現Ⅰ』には、ライティング力だけでなくスピーキング力を養うことができる Use it, Expressing, Activity のコーナーが各レッスンにあり、学んだ語句・文法・表現・発音の知識を使って、情報や自分の考えを発信する機会を多く設けることができる。また、教科書に完全リンクしている問題集や参考書、確認問題集がそろっていて、自律した学習者を育成するためによりスムーズに授業を運用できることから、採用を決めた。特別な実践をしているわけではないが、学年団の先生方と一緒に話し合いをしながら進めてきたことを報告したい。

2. 共通理解事項に基づいた指導

新学習指導要領の実施に向けて、英語科ではまず3年間の到達目標を定めた。そして、各学年の到

達目標、各課(レッスン)の目標へと下ろしていく。1学年では、英語科教員4人とALTで「育てたい生徒像」や「到達目標」を明確にし、共通理解事項として常に意識してきた。また、指導計画や使用するワークシートも共有して、どの先生の授業を受けても同じように学べるように心掛けてきた。本校の英語科が掲げる1年生の年間到達目標は以下の3つである。

- ①和訳を介さずに、教科書の本文を読んだり聞いたりして要点を理解し、それを自分の言葉で要約することができる。
- ②教科書の内容に関連した別の資料を読んでその要点を整理し、プレゼンテーションしたり英文を書いたりするとともに、その情報をを利用してディベートやディスカッションをすることができる。
- ③ペア・ワークやグループ・ワークを通して、他者との英語によるコミュニケーションを楽しみつつ、お互いにサポートしながら学習する態度を身につける。

教員の個性や教え方は一人ひとり違うが、共通の目標を定め、情報を共有することで、同じように授業を進められるようになった。また、指導計画に基づいて実践した授業に生徒がどのように反応したかを職員室で先生方に伝えあうことで、次の授業の参考に出来るようになった。職員室で授業だけでなく、生徒の反応についての情報を共有することは、英語科のみならず、同じ学年の他教科の先生方とも共有することができ、「学年全体で生徒たちを育てる」という雰囲気を作り出している。

3. 普段の授業で留意していること

英語科では、授業は生徒が主体であり、生徒に学ぶ勇気や自信を与えることが大切と考えている。教師は生徒の間違いやできなかったことを指摘するのではなく、継続的に小さな成功体験をさせることができられ、そのために生徒自らが「活動」する機会を授業内に設けることを心掛けている。先述したように、本校は、年間到達目標の設定から始まり、「生徒につけたい英語力」を先生方と共に理解を図ることによって、その「生徒につけたい英語力」のイメージを具現化できるように Backward で授業を組み立てている。

各レッスンの初めに Model Conversation として、レッスンのトピックに関連した、そのレッスンで学ぶ文法・構文・発音を含む会話文がある。まずは教科書を閉じて生徒とのインタラクションを行い、そのトピックについてのスキーマの活性化を図る。その後、内容についての Q&A を行い、会話文の意味を全員で理解したのち、モデル文を自分のものとできるよう、ペア・ワークで話者に分かれて音読練習をしたり、ディクテーションをしたりしている。Model Conversation や教師・生徒同士のやりとりで学んだ表現は Use it に取り組む際にも使用するよう指導している。

先述したとおり、授業では、共通のワークシートを活用し、どの先生の授業を受けても同じように学べるようにした。最初のうちは、手順も出来るだけ詳しくワークシートに書き込むことで、初めて本校で教える先生方にも戸惑うことがないように工夫した。ワークシートは、付属の CD-ROM に収録されているので、それを活用して作成している。

4. 家庭学習について

家庭では、授業の復習として、CD-ROM に収録されている単語・熟語シートや例文練習シートを配布し、授業中に習った語彙・表現を定着させている。また、「Use it 提出用シート」も配布し、与えられた日本語の英訳をするだけでなく、自分の考えや感想を英語で表現するための演習も行っている。Use it はどのレッスンも 3 文で書くタスクで、初めのほうは学んだ

文法知識を用いて文を書くタスクだが、レッスンが進むにつれて、1つのまとまりのある文章として 3 文を書くタスクになっている。最終的には、1つのメッセージを 3 文でどう伝えるか工夫するよう指導もしている。採点と添削は、教師が行う場合と生徒同士でお互いの答案をチェックさせる場合がある。正確さとともに、生徒たち自身が、もっと書こう、書きたいとする Motivation も大切にしながら、各自の間違いに気づくような仕掛けも大切にしている。

また、実力テストや週末課題の範囲に『Vision Quest 総合英語』を指定していて、年間の範囲表を年度当初に生徒に配布しているので、生徒はその範囲を踏まながら、各自で計画を立てて取り組んでいる。

5. パフォーマンス評価について

「英語表現I」が「話すこと」および「書くこと」の技能を中心に扱う科目であるので、本校では学年の英語科の先生方と一緒に年間指導計画を見ながら、「ここで、教科書の Show & Tell に取り組もう」とか「インタビューテストをしよう」と決めている。そして、生徒も教師も慌てずに、決められた時期にパフォーマンステストを実施できるよう、普段の授業でも「〇月にパフォーマンステストを実施する」と事前に生徒に伝えておいて、積極的に授業に参加するよう促している。また、各授業後には、その時間に自分が学んだことをまとめたり、自己評価させることにより、生徒の学ぶ姿勢を確認したり、生徒を励ます声かけに利用したりして、生徒にとってよりよい授業になるように心掛けている。評価についてはまだまだ課題は残っているが、今後は、生徒たち一人ひとりの学びの記録として可視化出来るようにし、その記録を生徒と教員が共有することによって、生徒の学ぶ意欲をより高めていくようにと考えている。

パフォーマンステストは時間も労力もかかるが、生徒によるアンケートなどの自己評価を読むと、生徒たちはパフォーマンステストを心待ちにしていて、「緊張はするものの、とても楽しかった」「また挑戦したい」との回答が多く、「先生、英語頑張ります!」とか「英語大好きです!」「次回はもっと自分の気持ちを

伝えられるように頑張ります」といった生徒たちの感想に元気とパワーをもらい、先生方とともに「また一緒に頑張りましょう!」という気持ちで授業に臨んでいる。

5. おわりに

これからも英語科がチーム一丸となって、「英語を使うことを通して、コミュニケーションを図ることの楽しさや素晴らしさを感じ、人と関わることが楽しいと思う生徒」「英語を使って人間関係を育み、生涯にわたって英語を学び続けようとする生徒」を育てていきたいと考えている。



<http://www.shinko-keirin.co.jp/>

20150201

〒 543-0052	大阪市天王寺区大道 4-3-25	TEL.06-6779-1531	FAX.06-6779-5011
〒 113-0023	東京都文京区向丘 2-3-10	TEL.03-3814-2151	FAX.03-3814-2159
〒 003-0005	札幌市白石区東札幌 5 条 2-6-1	TEL.011-842-8595	FAX.011-842-8594
〒 461-0004	名古屋市東区葵 1-4-34 双栄ビル 2F	TEL.052-935-2585	FAX.052-936-4541
〒 732-0052	広島市東区光町 1-7-11 広島 CD ビル 5F	TEL.082-261-7246	FAX.082-261-5400
〒 810-0022	福岡市中央区薬院 1-5-6 ハイヒルズビル 5F	TEL.092-725-6677	FAX.092-725-6680